

タ リ タ ・ ク ム

# “Talitha, koum”

「少女よ、私はあなたに言う。起きなさい」(マルコ5:41)

日本聖公会 正義と平和委員会・ジェンダープロジェクト

## コラム集

2016年4月23日

〒162-0805

東京都新宿区矢来町 65

日本聖公会管区事務所気付

正義と平和委員会

・ジェンダープロジェクト

TEL 03-5228-3171

発行責任者: 大岡左代子



## 私の瞳に映る景色

日本聖公会 正義と平和委員会 ジェンダープロジェクト

## 推薦のことは



首座主教・北海道教区主教 ナタナエル 植松 誠

今年1月、英国カンタベリーでアングリカン・コミュニオンの首座主教会議が開かれた。1998年のランベス会議あたりからクローズアップされた米国、カナダ聖公会での同性愛をめぐる問題で、今まで何回かの首座主教会議、全聖公会中央協議会では、アングリカン・コミュニオンの多くの管区が米・加聖公会を非難し、いくつかの管区は両聖公会と関係を断絶した経緯があった。さらに、昨年6月の米国聖公会総会

が、同性婚を認める法規改正をしたことから、アングリカン・コミュニオンの亀裂は一層深くなっていた。そのような中で開かれた首座主教会議は、その多くの時間をこの問題に費やした。多くの首座主教が、教会における、また聖書で定められている結婚とは男女間の忠実な、生涯にわたるものであるという点を強調し、そこから、米・加聖公会の同性婚の取り組みは正統信仰から離脱していると主張したが、それに真っ向から反対する首座主教もあり、議論はかみ合わないまま、最終的には、世界の聖公会は今後も分裂せずに歩むことを確認しつつも、米国聖公会を今後3年間、アングリカン・コミュニオンの中で対外的な部門から排除するという内容の勧告が多数決で採択された。

世界の聖公会が分裂せずに、共に歩むことは確かに嬉しいことではあるが、その代償を見たときに、それがあまりに大きく、しかも正しいとは思えない。首座主教会議は、キリストの愛の内に共に歩むというが、これらの勧告の中に、性的マイノリティの人々（LGBT）への思いやりは少しも感じられない。この勧告が、米国、カナダだけではなく、世界のLGBTの人々に深い痛みと悲しみ、また教会に対する不信を与えることを私は危惧している。

米国聖公会はその歴史の中で、奴隷制を容認した負の遺産を持っているが、その悔悟から、人種差別、女性差別などと取り組む中で、LGBT差別との闘いも当然のこととして教会の福音宣教の重要課題にしてきた経緯があり、だれをも差別なく神の愛する子どもとして教会に受け容れると宣言していることに私は深い尊敬の念を禁じ得ない。

私たち、日本聖公会はどこに立っているのか、今、深く問われていると思う。この小冊子があるためのよいテキストになることを願っている。

## 推薦のことば

### “セクシュアル・マイノリティの理解のために”



第 61 (定期) 総会期 正義と平和委員会委員長  
中部教区主教 ペテロ 洪澤一郎

このたび、正義と平和委員会・ジェンダープロジェクトから、ニュースレター「タリタ・クム」に掲載されている後藤香織司祭のコラム、「わたしの瞳に映る景色」がまとめられ、冊子になりました。

後藤司祭はご自身がトランスジェンダーであることをカミングアウトしており、セクシュアル・マイノリティを自分の宣教課題の一つとしています。後藤司祭は中部教区においてセクシュアル・マイノリティの人々と共に捧げる礼拝を 10 年にわたって行っていますが、日本聖公会のほとんどの教区から出席者がいると聞いています。それだけ多くの方々がいるにもかかわらずセクシュアル・マイノリティへの理解は教会においてもまだまだ十分とは言えないのが現状です。

今回、コラムがまとめられ発行されたことにより、その理解の一助になることを心から願っています。セクシュアル・マイノリティを心情的・感情的に受けとめるだけでなく、その背景を学び、知ることによりセクシュアル・マイノリティに対する理解が深められ、差別や偏見の解消につながり、共に生きることが普通になることを期待しています。主イエスの十字架による救いと愛は「性」の違いやその在り方、指向を超えてすべての人を包み込んでいると信じるからです。

多くの皆様にこの冊子をお読みいただき、日本聖公会におけるセクシュアル・マイノリティの理解がより深められますよう願っています。

正義と平和委員会・ジェンダープロジェクトではこれからもこの課題に関わってまいります。今後とも皆様のご理解とご支援をお願い申し上げます。

## 公開学習会 セクシュアル・マイノリティの声に聴く

### わたしの瞳にうつる景色 ～性同一性障がい者の声～

松原恵美子（ジェンダープロジェクトメンバー／大阪教区）

『タリタ・クム』第13号（2009年12月20日発行）より

8月22日（土）午後1時30分より、大阪聖パウロ教会にてジェンダープロジェクト主催、女性デスク、管区人権担当、大阪教区宣教部、京都教区宣教局社会部、中部教区宣教局共催で公開学習会を行いました。さまざまな教区や教団の方、講演者の友人など53名の出席でした。学習会は、まず後藤香織司祭から、用語説明がありましたが、8月22日限り有効ということでした。言葉の解釈のされ方はその時々によって変わるし、人によつての考え方も違う、辞書のように、この言葉はこういう意味という限定ではないということを知りました。それだけに、言葉の使い方の難しさや、誤解が生じるであろうことを考えさせられました。続いてAさんの講演。Aさんは女性として生まれ育ちますが、子どもの頃から女であることに違和感があり、成長するにつれ自分の身体や高い声に対して嫌悪感をもち、家も学校も何処にいても、人の頭の中でさえも“男”と“女”にカテゴライズされた世の中に自分自身の居場所がないという経験をされます。その内、自分は男でも女でもどちらでもない。自分は自分、Aなんだと思うことで、自分の居場所をつくったのだそうです。中にはその環境に苦しみ、身体を傷つけたり自殺をしてしまう人もいるそうです。30代になり大阪に来て、いろいろな人と出会う中で、自分と似た境遇の人にも出会い、「自分もこの世の中に生きていいのだ」と思えるようになったそうです。そして治療を経て戸籍の性別も変え、現在に至っているというお話でした。お話の中に、親友やご両親にカミングアウトをしたときのことが出てきました。親友には、「何か変わるの？見た目が変わっても中身まで変わるわけじゃないでしょ!？」と言われ、勇気が持てた。お母さんには「ごめんね」とずっと謝り続けられたけど、最近は「あなたの人生だから」と言ってもらえ、少しずつ理解をしようと努力してくれているのが分かる。「自分は女の子に生まれてきたけど、今は自分の生き方をしているから幸せなんだ」ということをこれからの人生を通して見てもらうことが大切だと思っている。休憩をはさんで、後藤司祭の講演。もともとカミングアウトするつもりはなかったけれど、中部教区の教役者会の中で、ランベス会議で同性愛者のことが問題になっている話になったときに「日本にはいないだろう」との発言があり、そのことについて考えよう、学習しようとはならなかった。教会の中にもセクシュアル・マイノリティはいるんだという思いがこみ上げ、「自分はトランスジェンダーだ」とカミングアウトしてしまった。結婚されているパートナーも初めは戸惑ったけれど、現在は理解してくれている。子どもたちも「パパ」から「チッチ」と呼び方が変わった。勤務していた教会の保育園の理事会で問題になったけれど隠さずに話したこと、教会の中ではなかなか理解を得られないこともあったけれど、一生懸命に働くことによって理解を得られるようになった、今まで黙っているしかなかった他の教会、教区の人たちから連絡をもらったこと、そんなお

話が続きます。もちろん理解者ばかりでなく抗議の電話、手紙、性的少数者を排除する内容のブログもあり、めげそうになることもあるけれど、自分だけでなく信徒の方のほうが辛い思いをしている、批判するにしても、状況をわかってほしい、悩みながら信仰生活をおくっている信徒の方のこともわかってほしいとおっしゃっていました。また、ご自身の生い立ちから聖職を志すようになったいきさつ、もともと東北教区の聖職候補生だったのに、中部教区の聖職になったいきさつなどが語られました。女性の姿になられた後、子どもたちがかわいそうだ、わがままなど声もあるけれども、お子さんたちは、「チッチが悪いんじゃない、そういうことを言う人たちが悪いんだ」と言ってくれるそうです。最後に教会で「同性愛がだめだ」、「わがままするのはどうなんだ」と言われると、セクシュアル・マイノリティの人は自分を肯定できず、教会を去り、病気になってしまうこともある。教会は命を光輝させることができる場なので、セクシュアル・マイノリティの人もその場を与えられたいとおっしゃっていました。その後、休憩時間中に質問用紙にかいてもらった質問にいくつか応じていただきました。お二人は自分のストーリーを語ってくださいました。あたりまえのことですが、みんなにそれぞれのストーリーがあるように、セクシュアル・マイノリティの方にもそれぞれのストーリーがあります。そのストーリーを私たち（教会）が排除している現実があり、私たち（教会）は誰と共に生きるのかということについて、改めて考えさせられました。私は以前、男女二分法に関して何にも疑問に思っていませんでした。10年前にある人権セミナーの実行委員をやったときに、申込み用紙に性別に○をする欄があるのはどうかということで議論になりました。そのとき、すでにトランスジェンダーの人と出会っていたにも関わらず、何が問題なのか、最初よくわかっていませんでした。その中であるメンバーがどちらにも○ができない人もいる、この欄があることによって、人権セミナーなのに、人を苦しめることになる、ということをおっしゃり、ようやく問題が見えてきました。そのときに、偏見をもっているつもりはなくても、無知、鈍感なことによって人を傷つけることは起こることに気づきました。あらためて周りをみたら、私たちの周りには、男女二分法ばかり。また、そのことに疑問をもたず、あたりまえになっていることがとても多いと思います。教会が、悩んでいる人と共に生きようとするのはあたりまえのことです。でも残念ながら、そのあたりまえができていない現状があることを私たちは知り、考え、行動しなければいけないのではないのでしょうか。私たちは、今回の学習会を通して、まず、知ること、出会うということを経験できたと思いました。講演に先立ち、司会者から「ジェンダープロジェクトでは『女性』は性別の女性だけでなく社会の中で生きにくくされている少数者、マイノリティである人たちの総称の一つととらえて活動している」との説明がありました。（タリタ・クムにも書いています）

ジェンダープロジェクトでは、これからも少しでも多くの人と一緒に考える一つの機会としての学習会を開催していきたいと考えています。次回の日程、場所等は未定ですが、今後とも活動へのご理解とご協力をどうぞよろしくお願いいたします。

## 「男と女」そして神さま

司祭 後藤香織（中部教区）

『タリタ・クム』第12号より（2009年5月25日発行）

アメリカの教会などでは、「包含的言語」(inclusive language) を使って、教会に横たわる父権制・男性中心主義の意識を変えて行く試みがずいぶんと昔から行われています。なかには Lord(主) という単語は明らかに男性名詞なので、God と言い換えてみたら、Oh My Lord という聖歌の歌詞が、Oh My God! (しまった!) になってしまった。なんていう、笑うに笑えない話も聞きますが、文法における性(せい)を持っていないわたしたち日本の教会にとっては、そんな努力もどこか他人事のような感じがします。しかし、日本の教会が<父権制・男性中心主義>から自由なのかというと、そんなことはまったくなく、むしろ<父権制・男性中心主義>に絡めとられて身動きが出来なくなっているのがわたしたち日本聖公会の現状ではないでしょうか。わたしたちは祈るときに、「父と子と聖霊」の名によって祈ります。では、神さまは「父」であり、「男性」なのでしょう吗? 福音書の中で用いられる「父なる神」という表現は、ローマ帝国の父権制支配に抗って、地上の誰をも「父」と呼ばず、平等な社会を目指すという反骨精神の宣言だといえます。ですから、「父」と呼びかけるのだから、「男性」であるとし、父権制・男性中心主義の擁護に「父と子と聖霊」の呼びかけを使うことは、当初の意図に反するものです。そしてまた、ヘブライ語聖書(旧約聖書)では、神さまを「父」と呼ぶ例は多くはありません。それは、神さまが「父」という矮小化されたイメージに押し込められてしまうことが、偶像礼拝になるためです。ヘブライ語聖書では、限定されたイメージではなく、さまざまな呼び方や比喩を用いて、神さまが人間には思い描くことの出来ない超越した方であることを示そうとしています。このように言うと、その呼び方の多くが男性名詞で記述されているのではないかと指摘を受けます。ですが、単語の標準形は男性形というヘブライ語の言語的な特性(ここでは限界)を、神さまに投影することは、神さまを限定、矮小化しないというヘブライ語聖書の他の箇所での努力から出来ないと言えるのではないのでしょうか。たとえば、イザヤ書 42 章 14 節に「今、わたしは子を産む女のようにあえぎ激しく息を吸い、また息を吐く」という箇所があります。「憐れみ」という意味のヘブライ語の単語は、「子宮」という言葉から派生していて、神さまの憐れみ深さは、女性のイメージの中で語られますが、このイザヤ書の箇所でも、神さまを「父」ではなく「母」のイメージで表現しています。このような子どもを慈しむ母親の比喩を神さまに使うことは、マタイ福音書 23 章 37 節(ルカによる福音書 13 章 34 節)にある「エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、自分に遣わされた人々を石で打ち殺す者よ、めん鳥が雛を羽の下に集めるように、わたしはお前の子らを何度集めようとしたことか」というイエスさまの自身の自己理解にも引き継がれています。では、神さまに対して「母」と呼びかけて祈ることをお前は奨励するのかと聞かれれば、答えは否です。それは、「母」という呼びかけも、教会に横たわる父権制・男性中心主義を擁護する限定した呼びかけとしての「父」に対峙することでは、意味があるかもしれませんが、「父」と同じように、継続して常時使われれば、やはり限定したイメージに神さまを押し込めてしまうことになるからです。そろそろ、わたしたちの教会が、どっぷりと浸かってしまっている男女二分法を、神さまに当てはめることをやめて、「男性」「女性」どちらにも限定されない、豊かなイメージをお持ちの神さまに呼びかけることを始めてみたいと思います。そのような神さまへのさまざまな呼びかけの積み重ねが、わたしたちを身動きできない状況から解き放ってくれるのではないのでしょうか。

～あの人は、ああいう人よ～

『タリタ・クム』第12号より（2009年5月25日発行）

皆さん、こんにちは。男性から女性への性別越境者（\*1）の後藤香織です。男女二分法の社会の中、わたしたち性別を移行して生活をする者は、社会的・文化的な性のありようの壁の狭間で、おそらく男女二分法の中で生活しておられる多くの方とは、ちょっと違った経験をしながら生活しています。このコラムではそのような方々の瞳には映りにくいけれど、わたしたち性別越境者の瞳には映る景色を紹介しながら、わたしたちが一般的に持っているジェンダー・バイアス（\*2）について、ご一緒に考えてゆきたいと思います。どうぞしばらくの間おつきあいください。さて、人は誰も程度の差はあれ、相手の年齢や社会的地位、そして性別によって、人への接し方を変えて、対人関係を築いています。それは多くの場合、意識してではなく、無意識に行われます。性別によって接し方が異なりますが、女性は、ある人の女性に対する接し方しか経験出来ませんし、男性は、ある人の男性に対する接し方しか経験出来ません。わたしは同じ方に、男だった時と、女になってからと、お会いすることが偶にあります。つまり同じ方の、女性に対する接し方と、男性に対する接し方の両方を経験することがあるのです。最初にその経験をしたときには、あまりにも対応が違うので、本当に愕然としました。その事を、その方と一緒にお会いした女性の方に話すと、「あの人は、ああいう人よ」という答えが返ってきました。確かに、女性に対しては「ああいう人」なのかもしれませんが、男のときには丁寧に接してもらったわたしにとっては、「ああいう人」と思うことが出来ず、改めて「男性の特権」がいかに大きなものであるかを感じました。たまたまこの方の女性と男性への接し方が大きく違っていたということはあるかもしれませんが、女性と男性に対して全く同じ接し方をする人のほうが、実は珍しいということ、わたしは毎日経験しています。そして大きな問題は、それが意識的にではなく、無意識に行われているということです。まずは、わたしたち自身の女性と男性への接し方の違いを、意識してみませんか？そこから、わたしたちが持っている社会的・文化的な性のありよう、あるいは性別による偏見が見え始めると思います。

\* 1 性別越境者：生物学的な性別に付与される性別役割を越えて生活をする者。いわゆるトランスジェンダーのこと。「越境者」という表現は、当事者から快く思われませんが、性別二元論幻想に対峙するためにここではあえて使います。ちなみに性別を女から男へ移行する人を FtM (female to male)、反対を MtF (male to female) と呼びます。

\* 2 ジェンダー・バイアスとは、社会的・文化的な性のありようによる偏見、あるいは性別による偏見のこと。日本語としてこなれていないという批判はあるかと思いますが、他に良い言葉もないのでとりあえず使ってみます。他に良い言い回しがありましたら、お教えください。

## ■ ■ ■ ■ ■ コラム わたしの瞳に映る景色 ② ■ ■ ■ ■ ■

### ～思い込みによるジェンダー投影～

『タリタ・クム』第13号より（2009年12月20日発行）

「お前のどこが女なんだ」。「香織って女らしいよね」。この2つの言葉は、どちらも私が身近な人達から言われる言葉です。私を男の時から知っている方々は、私に対する「男」というイメージを払拭することはどうしても出来ないようで、今でも時々「女だとは到底思えないな」と言われます。昔はそう言われるのは、「まだまだ私の女としての自覚が、努力が足りないからだ」などと考え、女性のジェンダーを身に着けよう、もっと女らしく振る舞おうと、一生懸命に努力したものでした。ところが不思議なことに、同じ時期に私が「男」だったことを知らない友人がずいぶん増えて来ていたのですが、その人達からは、「女らしいよね」と言われることはあっても、決して男っぽいなどとはいわれることはないのです。初めから、私を「女」と認識している人達の中では、無理に女らしくしなくても、反対に多少男っぽく振る舞っても、「男」だとは決して思われません。私が体験しているこの不思議な出来事は、私たちが人の「女らしさ」や「男らしさ」を、相手の性別に合うように、わざわざ選択して見つけ出し、その人に投影して、「女らしい」「男らしい」と判断していることの表れなのです。この偏見は、私自身なかなか克服するのが難しく、どうしてもトランスジェンダーの友人たちの中に、体の性別に従ったジェンダーを投影してしまいがちです。周りの人たちが誰も気がつかないのに、私はトランスジェンダーの人に気づき、その人の振るまいが気になってしまうのは、その現れかもしれません。「いや～そんなことはない。お前は自分の努力不足を人のせいにしてる！」と、思っているらっしゃる、あなた。実は、目の中の丸太に気がつかないでいるのかもしれないよ。身近な人への「あの人はホント女性らしいな～」と、いう感じ方が実は思い込みかもしれないと一度疑って見ることをお勧めします。それがきっかけで、自分の目から丸太を取り除くことが出来、はっきりと人が見えるようになるかもしれません。

## ■ ■ ■ ■ ■ コラム わたしの瞳に映る景色 ③ ■ ■ ■ ■ ■

### ～「トイレはどっちに入るんですか？」～

『タリタ・クム』第14号より（2010年6月25日発行）

わたしが自分のセクシュアリティについて話した後で良く受ける質問に、「トイレはどっちに入るんですか？」というものがあります。女性と男性でハッキリと分けられている場合にどうするのか、皆さんにとっては素朴な疑問なのでしょうね。性別の狭間を生きるわたしたちトランスジェンダーにとっては、そのハッキリと分けられている場合にどうするのが、厄介な問題なのです。見かけの性別と生活実態に齟齬がなければ、見かけの性別によって、女性の方に入るか、男性の方に入るかを決めれば良いのですが、



生活実態と見かけの性別が食い違っていることも多く、また自分が他の人からどちらの性別で認識されているのか、判断しかねることもあり、それはとても頭を悩ませることなのです。5年前、わたしは知らない人からは女性と認識されるようになっていましたが、まだ男として生活をしていました。ある時、保育園園長の集まりに出席したのですが、その大きな会場に集った人のほとんどが女性の園長でした。休憩時間、女性トイレには長い行列が出来ていましたが、わたしは「男」でしたので、順番待ちの女性を横目にガラガラの男性トイレに。皆さん、何が起こったと思われますか？行列を作っていた女性の皆さんは、わたしを待ちきれずに男性トイレに駆け込んだ「女性」と思ったようで、わたしに続いて、ぞろぞろと皆さん男性トイレに…。女性の皆さんに、ついてこられたわたしが面食らってしまったのは言うまでもありません。どっちに入るのかという質問に、そんな話も交えながら、「わたしは女性用トイレを使いますよ。」と答えると、「では戸籍は女性に変えたのですね？」という質問をする人がいます。「男性のあなたが、女性トイレに入るのは、犯罪ではないのですか？」という趣旨なのですが、何とも正鵠を誤る質問だと申し上げたくになります。わたしたちは、自分が嫌とか、こう行動したいとかいうことよりも、男女二分法の社会で、周囲の人が混乱しないようにとまず考えて、どうするのかを考えているのです。人が女であるのか、男であるのか、戸籍の性別によって判断すれば良いと、簡単に思われていらっしゃるのでしょうか。わたしたちトランスジェンダーも、仮に体の性別、生活上の性別、書類上の性別の食い違いを、戸籍の性別が本当だと言って、押し通せる社会であったら、まだ苦労は少ないとも思います。でも、わたしが男性トイレを使ったら、周りの人が戸惑うのは目に見えていますし、女性から男性へのトランスジェンダーが、戸籍の性別が女だからといって女性トイレに入っていたら、それこそ大変なことになります。街の真ん中で、なぜか異性装をしていたあなた、突然トイレに行きたくなりました。さて、「トイレどっちに入りますか？」そして、その判断



でどんなことが起こるのかを、一度考えてみていただければ幸いです。



LGBTの中でも、見た目が中性的な人や、心と体の性が一致しない人の中には、男女別トイレの順番待ちをしているときに「あっちに行って」などと言葉を掛けられることもある。そんな中、比較的利用しやすいのが男女共用の多目的トイレだという。

<http://matome.naver.jp/odai/2144264524836088301> より

～女性と男性の体格差は自然～

『タリタ・クム』第15号より（2011年1月25日発行）

ずいぶん前のことですが、教会の行事でボーリング大会が開かれたことがありました。その大会では、女性の参加者にはハンディが与えられるというルールが提示されました。わたしも女性ですのでハンディをもらっての参加です。その日わたしは調子が良く、ハンディももらっていますので、優勝争いに加わる状況になりました。すると大会の担当者からは「優勝しないでよ」と耳打ちされ、他の参加者からは「後藤司祭がハンディをもらうのはずるいでしょ！」という声が出始めました。幸い(?)その後は調子が崩れて、優勝争いからは脱落、皆さんからの「ずるい」という不満もいつの間にか消えていきました。一般的な女性と男性の体格差、体力差に与えられたハンディですので、元々男であった後藤にハンディはずるいと言われるのは、個々人の体格差はさておき、なるほどその通りです。現代のスポーツで、同一競技であってもほとんど例外なく、男性と女性と一緒にプレーすることがないのは、生物学的に女性と男性に体格差があるためです。モンゴロイドは、他の人種に比べると女性と男性の体格差が少ない人種ですが、それでも筋力等の差は小さくないように思います。では、生物学的な体力差、体格差は、本当に純粋に生物学的な差なのでしょうかね？わたしは名古屋の街を歩いていると、知らない人からすれ違いざまに「でかいな」と呟かれることがあります。確かにわたしは身長166cmありますので、女性としては大きいのですが、人から「でかいな」と呟かれる筋合いはありません。この呟きの背景には日本の多くの人が「女性は小さいもの」「女性は華奢である」「女性は小食」という思い込みがあるように思います。そして「でかいな」と呟かれる中で、大きな女性は大きいことにコンプレックスを持つ状況があり、華奢であろうと多くの女性が思い、努力をするのであれば、それは純粋に生物学的な差とは言えないように思います。また、ずいぶんと前から、子ども用の化粧品が販売され、流行を通り越して、定着しています。この子ども用化粧品、結構な量の女性ホルモンを含有しているものも残念ながらあります。多量の女性ホルモンは骨の発育を停止させるため、小さいうちから化粧をする習慣を持つ女の子は、身長の伸びを自ら止めてしまうこととなります。そんな状況を見ていると、どこかで、わたしたちが持っている性別による偏見が、男女差をさらに広げているそんな可能性もあるように思えてなりません。ちなみに、最初の話に戻ると、男性から女性へのトランスジェンダーも「性別適合手術」後、2年経過すればオリンピックに出場することも現在は出来るそうです。わたしも男の時に比べると、ずいぶんと筋肉落ちてしまったんですけど、やっぱりハンディもらおうと「ずるい」のですかね？

となりのLGBTさん  
性的少数者があたりまえに生きられる日本へ  
(朝日新聞デジタルSELECT)より



～性別欄は本当に必要なの？～

『タリタ・クム』第16号より（2011年6月25日発行）

ある日、こんなことがありました。FtM（女性から男性への）トランスジェンダーの彼が初めて礼拝に参加しました。受付でアッシャーの当番の方は、出席者名簿の男性欄を指さしながら、ここに名前を書いて欲しい旨説明くださいました。戸籍は女性のままの彼は、促してくださったので、躊躇することなく男性欄に名前を書いて礼拝に出席しました。彼は礼拝後「こっち（男性欄）に書いてと言ってもらえて良かった」と微笑みました。礼拝に出席するときに、出席者名簿に名前を書いてももらいます。多くの教会では、出席者名簿は男性と女性に別れています。そしてほとんどの方々は、どちらの欄に自分の名前を書くか躊躇したりはしないでしょう。わたしは女性として生活を始めてからもしばらく、出席者名簿の「男性」欄に名前を書いていた。男性の欄に女性の名前があることで、わたしたちトランスジェンダー達を感じている躊躇を少しでも感じてもらえたら、という思いからでしたが、果たしてどうだったのでしょうか。そんなわたしが「女性」欄に名前を書くようになったのは、ある出来事からでした。その日わたしはいつものように、礼拝の始まる前に男性の欄に名前を書いていた。礼拝に出席しようとしてやってきた彼女は、わたしの名前が男性欄に記されているのを見て、署名をしようとした手を止め、こう聞いてきたのです。「わたしも男性の方に書かないとダメですか？」彼女はわたしと同じMtF（男性から女性への）トランスジェンダーです。もちろん、彼女が元男性であったことはわたししか知りません。女として教会の扉を開き、女として教会生活を始め、女として洗礼堅信を受けて、教会の誰もが彼女を女性として受け入れています。でも、自分の名前を女性の欄に書くことは、彼女の中で「どこか嘘をついている」感じを拭えないものだったのです。「ごめんね」そう謝りながら、わたしは名前を女性欄に書き直しました。彼女の感じる必要のない罪悪感を和らげるために。聖公会の様々な行事の申込書にも、性別欄を目にします。そしてそこには「男・女」という印字がしばしばされています。中には「女・男」と記載されていることもあり、何かしら男女二分法について考えているのだと感心することもあります。でも、何故性別が問われているのかは、書かれてはいません。宿泊の部屋割りのためなのか、保険に加入するためなのか、他の理由があるのか、何故性別を問われているのか、その理由が分からない場合も、実はわたしたちトランスジェンダーはその問いには答えられないのです。至る処で何気なく、性別が問われるのですが、果たしてその問いかけはどうしても必要なものなのでしょうか。必要だと意識して質問して下さっているのでしょうか。わたしの健康保険被保険者証の性別は「男」です。でも、どこの病院でも被保険者証の性別欄をしっかりと見ていませんので、わたしのカルテや診察券の性別は「女」と記載されます。年に一度の健康診

断でもおもしろいことが起こります。検診は、わたしが男の時から続けて同じクリニックで受けていますので、健康診断の書類の性別は「男」になっています。でも、体の多くが女性の状態ですので、検査内容もマンモグラフィー検診などの女性の検査項目を入れてもらわないといけません。検査を受けて行く途中で、書類に印刷されている性別記載「男」が、いつのまにか手書きで「女」に書き直されるのです。性別欄がどうしても必要な医療現場でさえ、このようにその取り扱いはとても曖昧です。海外では性別を聞くこと自体が差別になることもあり、問いかけられる場面がとても限定的です。必要がなければ、問われることはない国がたくさんあります。日本でも最近は行政の書類などで、不必要な性別記載はどんどんなくなってきています。次の主日に、出席者名簿に名前を書きながら、性別欄で躊躇している「わたしたち」が教会の中に多くいることを念頭に置いてもらえたら幸いです。それはきっと、わたしたちの聖公会が、誰をも排除しない教会に向かう一つの歩みになって行くのではないかと、そう思うのです。



「性はグラデーション～学校の安心・安全をどうつくる？どう守る？」本の表紙の絵より

■ ■ ■ ■ ■ コラム わたしの瞳に映る景色 © ■ ■ ■ ■ ■  
～名前のこと～

『タリタ・クム』第17号より（2011年10月25日発行）

ある大学の会計の方から、「源泉徴収の関係で本名を教えてくださいませんか？」と言われました。どうもわたしの「香織」という名前を通名だと思われたようです。現在、わたしの戸籍名は「後藤香織」です。戸籍の名前を変更してからはまだ10年経っていませんが、「香織」という名前自体は、大学生の時から使っていますので、昔からわたしをご存じの皆さんは、違和感を持たれる様ですが、わたしの中では“しっくり”来ています。姓が変わることは、法律婚をされる方々の半分の方（それは圧倒的に女性ですね）が経験されますが、名前が変わる経験をされる方は多くはないでしょう。わたしは生まれた時、姓も名も今とは全く違う名前でした。姓が変わるにせよ、名前が変わるにせよ、それは簡単なことではありません。良く、わたしが女性名に改名したのを浮ついた気持ちからの、親をないがしろにする行為だと非難する人がいます。しかし、男女をしっかりと区別する二分法社会で、外見の性別と名前が指し示す性別が食い違っていることは、とても生活しづらいことを皆さんはご存じないでしょう。名前を変えることは大変ですが、それ以上に男性名を使い続けることの方が、わたしには大変なことだったのです。まだ名前を変えていないある日、わたしは選挙の投票に行きました。その時はまだ、「投

票所入場券※」に性別まで記載されていた時代でした。他の方は、生年月日の確認だけで何事もなく、投票用紙を渡されていました。しかし、わたしが生年月日を言うと、「これはあなたの入場券ではありませんね」という言葉が返ってきました。わたしは「生年月日が違っていませんか?」と聞くと、間違っていないと言います。では、どうしてわたしのでないと言うのか尋ねると、「あなたは女性でしょう」と言うのです。この後、本人だと証明できる書類を持ってくれば投票が出来るという担当者に、異議を申し立てて、やっと投票が出来たのは1時間も後のことでした。こんなことを毎回経験しなければならないのは、たまりませんので、始めから選挙に行かないのが、残念ながらトランスジェンダーの少なくない解決策です。選挙は頻繁にはありませんが、病院や銀行、その他、身分証明書を求められる場面で、外見と名前が示す性別が食い違っていると、怪訝な顔をされることは日常茶飯事です。たとえトランスジェンダーでなく、そして自分の名前に嫌悪感がなかったとしても、そんな状況に置かれたら、自分の名前を変えたいと思わないでしょうか?名前を付けてくれた人には申し訳ないと思いますが、わたしは男の時の名前が好きではありません。ときどきわたしの昔の名前をわざわざ口に出す人がいますが、それはわたしにはとても不快なことです。好きではない名前を使うことによって起こってくる、沢山の煩わしさから解放されたいと思うことは、そんなに分別のないことなのでしょう。自分には理解できないことだからこそ、馬鹿にして見下す前に、どうしてそうなのか考えて欲しいと思います。皆さんにとっては煩わしくない、男女二分法の社会の当たり前でわたしたちトランスジェンダーが感じるしんどさが少しでも軽減されるように。

※「投票所入場券」:自治体によって多少呼び方が違いますが、選挙人に対し選挙が行われることをお知らせし、投票所で選挙人名簿の本人確認をスムーズに行うために送付するものだそうです。現在は、この入場券自体には性別の記載がなくなっていますが、名簿に性別が記載されており、外見の性別が違っているとスムーズには投票できないのが未だ現実です。



～チャーチ・ハラスメント～

『タリタ・クム』第18号より（2012年5月25日発行）

わたしは定期的に「性同一性障害」の治療で、遠方の病院まで通っています。性同一性障害の治療、カウンセリングは「ガイドライン」という、日本精神神経学会の作成する指針に従って行われます。以前ある信徒さんから、「あなたの性同一性障害であるという診断が間違っているのではないか、もっとちゃんとした……医者にかかるべきだ」と言われたことがあります。わたしの主治医も、セカンド・オピニオンの先生も、ガイドラインの作成委員の方々です。ちゃんとした……お医者さまで、わたしはもちろん信頼しています。それで、この遠方までの通院は、長くても15分程度のカウンセリングで終わるのですが、わたしとは直接関係のない話もその中に含まれます。その話というのが、大変残念なことに、他の性同一性障害の患者さんに関係して、意見を述べに来るキリスト教の牧師たちのことなのです。「診断を取り消せ」とか「普通の状態に治療しろ」とか、半ば殴り込みのような勢いでやって来る人たちは、どういう訳か、みんながみんなクリスチャンだというのです。お坊さんがやって来たり、他の宗教の人がやってくることはなく、キリスト教の人だけがやってくる。どう考えてもキリスト教に問題があるように思えてなりません。実際に、某新宗教の方々の、セクシュアル・マイノリティに対する理解と対応は、とても定評があるのですが、そのしっかりした対応に比べると、あまりにも一方的に自分の「正義」を振りかざす、クリスチャンたちの暴力的な対応は、お粗末すぎて話を聞いていて本当に悲しくなります。この原稿を書いている間にも、自分らしく生きる決断をしたことを、牧師に告白した方から、そんなことをすれば「地獄に墮ちることになる」と脅しを受けたという相談が舞い込みました。「神の裁きがある」とか「同性愛は聖書で禁じている」とか、セクシュアル・マイノリティに対して行われるこれらのクリスチャンの言動は、神さまの権威を笠に着た「チャーチ・ハラスメント」とでも呼ばれ得る、教会のハラスメントの特徴を如実に示した、暴力以外の何ものでもありません。神さまや信仰、そして聖書の権威を笠に着て、自分の意見を「正義」として振りかざして行われる教会特有のこのハラスメントは、残念ながら教会の様々な場面で見聞きすることが出来ます。なかでもセクシュアル・マイノリティは、「悪」である、という教会の中にある漠然とした思い込みが、セクシュアル・マイノリティへの言動を、それが自分の思いであるにも関わらず、神さまの権威を笠に着て「正義」を振りかざす「チャーチ・ハラスメント」となって現れやすいのでしょうか。そして、この言葉の暴力は、発言する人自身は、「正義」と認識しているために、顧みられることはなく、さらには周囲から容認、称賛される場合すらあるのです。わたしたち教会は、相手の状況や事情を考慮せず、自らの「正義」を振りかざして、人々を攻撃するまえに、まずそのような自らの暴力性、ハラスメントをなんとも感じない姿勢を真摯に顧みることが必要なのではないのでしょうか。わたしがカウンセリングの時に、「クリスチャンの人たちは、神さまを信じている人たちなんだよね？」という疑問を、お医者さまから聞かなくて良くなることを祈っています。

～ わたしと家族のエピソード ～

『タリタ・クム』第20号より（2013年5月25日発行）

ある方から「毎回辛そうなことばかり書いてるけど、何か楽しいことはないの？」と聞かれました。ですので、楽しいといえるかどうか分かりませんが、今回はわたしと家族のエピソードをご紹介します。

わたしは昔、子ども達から普通に「パパ」と呼ばれていました。現在は、「チッチ」と呼ばれているのですが、それはこんな理由からです。

子ども達がまだ小さかった頃から、家族で出かけるときに、わたしは良くスカートをはいていました。地下鉄などに乗っていると、子ども達はわたしに呼びかけるとき、スカートを引っ張りながら、「パパ」と呼びかけるのです。家族の中では「パパ」でも、あまり問題はなかったのですが、スカートをはいている人が「パパ」ですと、周りの人たちがビックリします。それでも、地下鉄はまだ良いのですが、女性トイレや温泉の女風呂で「パパ」と呼びかけられるときには、冷や汗ものです。そこで、「パパは『パパ』だけど、『パパ』と呼ばれると困ることが多いので、別の呼び方を考えてください」と子ども達に提案し、家族会議で決まったのが、「父」をカタカナにして、詰ませた「チッチ」という呼び名なのです。

また、子ども達と昔の写真を見ながら、整理をしていたとき、こんなことがありました。わたしが下の子を抱っこしている写真が出て来ました。下の子はその写真のわたしを指さして「この人誰？」と聞いたのです。下の子の記憶の中では、わたしは昔から女性の姿だったようで、こっちが驚かされた出来事でした。上の子が盲腸で入院したときには、わたしが最初に付き添いをしていました。看護師さんは、わたしを「お母さん」と認識していたのですが、途中で付き添いを連れ合いと交替したために、混乱されたようです。後で、「何で、最初に看護師さんにお母さんと呼ばれたときに、違いますって言わなかったの！」と、連れ合いに叱られてしまいました。病院と言えば、連れ合いの具合が悪くなって病院に連れて行ったときに、一緒に診察室に入ろうとしたわたしは、入り口で「ここで待っていてください」と制止されてしまいました。一通り診察が終わったのでしょう。廊下のベンチで待っていたわたしは、看護師さんから、「患者さんとはどういうご関係ですか？」と聞かれ、配偶者であることを告げて、始めて診察室に入ることを許されました。「夫」と名乗ったわたしを見ながら、「旦那さん！ですか？」と返して下さった、看護師さんの顔が忘れられません。男の姿だったときには、「夫」と名乗らなくても、一緒に診察室に入れたのですが、今では、夫婦だと名乗っても信じてもらえない、わたしたちです。

家族で外出に出かけても、わたしたちは、一家族とは認識されません。お会計の時には必ず「ご一緒に宜しいですか？」って聞かれてしまいます。最初のうちは、「一家族

ですから！」なんて、言ってみたこともありましたけど、レジの人にはどうでも良いことですからね。最近、素直に「一緒に良いです」と答えています。

子ども達の友達が、家に遊びに来るとこんなことが起こります。わたしの連れ合い(妻)に先に出会ったお友達は、連れ合いを母親だと思えます。わたしと先に出会ったお友達は、わたしを母親だと思えます。そして、別の機会に遊びに来て、先に出会った「お母さん」と違う人に出会った友達は「この人は誰？」という疑問を、子ども達にぶつけます。お母さんに見える2人が、実は「お母さん」と「お父さん」だと知ったときに、小学生ぐらいまでは、何となくそのまま受け止めます。でも、中学生にもなると、子ども達の冗談だと思って「またまた、本当はどんなの？」と返してくるのです。子どもが高校生になって遊びに来た友達が、わたしが父親であることを知ったときに、「うちのお父さんと取り換えて欲しい」と言っているのを聞いたときには、さすがに面食らいましたが、ジェンダー・バイアスが経験の中で身についてくることを、子ども達の友達の反応が良く示してくれているなど、毎回面白く思っています。

一般的な「家族像」とは、ちょっと違う我が家と出会う人たちは、いろいろとビックリされたり、混乱されたりされるようです。「周りの人に、気を遣わせてなにが面白いの」と、苦言を呈される方もいらっしゃるかもしれません。でも、わたしたち家族は仲良く、ささやかな幸せを大切にしながら過ごしています。ですから、こんな家族もいるのねと認識してもらえたら嬉しいです。そんな認識を多くの方がしてくださったら、きっと世の中もっと暮らしやすくなるように思うのですが、如何でしょうね。

余談ですが、配偶者を性別に関係なく呼ぶ、良い呼び方ないでしょうか。連れ合いってちょっと熟れない呼び方なもので...

性的マイノリティ(性的少数者)を  
ご存じですか？  
[同性愛]性同一性障害]  
って何だろう？

多様性を認めあう社会は  
多くの人にとって  
生きやすい社会です。

**レインボープライド愛媛**  
RAINBOW PRIDE EHIME

自分らしくいたいから、笑って一人じゃないは

私たち「レインボープライド愛媛」は、同性愛者や性別に違和感を持つ人々(性同一性障害等)といった様々な性的少数者が、地方でも自分らしくイキキと生活できる社会を目指して四国・松山で活動しているNPOです。愛媛でも数多くの同性愛者や性同一性障害の人々が社会生活を送っています。ですが、当事者の存在が認識されないことも多く、認知や理解の差が広がっています。狭い範囲の中では、多くの当事者は自分を隠して生活するしかありません。差別や不当な人に対する恐れ、害意を打ち明けられないのが辛いのです。しかし、私たちも社会の一員として愛を交わっていかねばならない。この世代を生き抜くものとしての責任を果たさねばならない。との強い思いから、当事者や支援者によって、当団体は設立されました。性的少数者同士の支え合いと、様々な活動を通して、正しい知識と理解を広げていきたいと思えます。「多様性を認め合う、誰もが生きやすい社会」を目指して、積極的な働きかけをしています。

同性愛や性別に違和感を持つ人々の  
問題に取り組む  
「レインボープライド愛媛」ポスターより



～周りの人が、そう思ってくれないと、不思議とそう出来ないのです～

『タリタ・クム』第22号より（2014年7月25日発行）

昨年8月の第2回女性会議の後に、「第2回日本聖公会女性会議かわら版」が発行され、各教会に配布されました。その2頁の最後に、「日本で2013年までに按手された女性の司祭は？…16人（北海道3，東京4，中部3，京都3，九州2，沖縄1）。そのうち、5人が退職」と記されているのを見て、ある方がわたしに「あれ？これ間違ってますよね。中部教区が3人になっていますよ。渋川先生と金善姫先生の2人だけですよね」とおっしゃいました。

よくわたしのことを許せない方々から、「お前は男として司祭に按手されたのだから、女だと言い張るならお前の按手は無効だ」等と難癖を付けられることがあります。でも、この方々はわたしが自分を女だと言い張っていることを、認識はしています。こういう悪意の「お前なんか、女ではない！」という攻撃には、最近慣れて来ていて、昔ほど精神的に堪えなくなっています。むしろ反論をする気力が湧いてくることもあるくらいです。しかし反対に、先ほどの中部教区の女性の司祭は2人だけとおっしゃった方は、わたしのことを女性だとは思ってくれてはいません。多くの方が、わたしのことを女だとは思ってくれていないことは、他の様々な機会に思い知らされていますが、悪意の「お前なんか、女ではない！」とは違い、無意識の「女性だとは思っていない」という周りの人々の対応には、声を張り上げて女だと主張するのは、自分の努力が足りないことを棚に上げているような気にさせられ何となく憚られます。ですから本当にどう対処したらよいのか分からず、精神的にも堪えますし、これまでは途方に暮れるばかりでした。

昨年、ある大学で「神さまは父なののでしょうか？～ジェンダー・アイデンティティと他者からの認識～」という題でお話をさせていただく機会がありました。その準備をする中で、キリスト教とユダヤ教、イスラム教が共通に使用するヘブライ語聖書（旧約聖書）では、1000回以上「父」という単語が使われますが、その中で神さまが父と呼ばれるのはたった15回であり、直接の呼びかけは2回のみであること。さらに、むしろ偶像礼拝を避け、神を父とはしないために、多様なイメージで神を表現する努力が、ヘブライ語聖書の中で惜しみなくされていることを再確認しました。それは、本来のユダヤ教やイスラム教では、神は父ではないことは明らかなことから、わかります。また、キリスト教が神さまを父と呼ぶきっかけとなっている、福音書の「父なる神」表現は、イエスさま自身が多く用いられたのではなく、最初期のキリスト教共同体で「父なる神」表現が用いられるようになったという最近の研究結果も再度確認しました。割愛しますが、聖書では、神さまが自分を父と呼ぶようには語られておらず、むしろ「父」に押し込められ、苦しんでおられる神さまの思いを聴き取り、神さ

まを「父」から解放しなければならないのではという過激なお話をさせていただきました。

また、マルコ福音書 6 章の「ナザレで受け入れられない」というエピソードで、イエスさまは 5 節「そこでは、ごくわずかの病人に手を置いていやされただけで、そのほかは何も奇跡を行うことがおできにならなかった。」ことが記されています。故郷で、預言者であることを認識してもらえないために、イエスさまは自分らしく振る舞うことが出来なかったとことに触れ、イエスさまでさえ、周りからの誤った認識に不自由さを感じられたのだから、わたしたちは周りの人々から自分を、正しく認識してもらうことが、元気に生活する上で必要不可欠なのだと、締めくくりました。

そんな思い巡らしの中で、先ほど書きました、多くの方の無意識の「女性だとは思っていない」という対応にも、めげずに「わたしは女です！」と主張していく必要があるのだと、今、思っています。私のように、カミングアウトをしても認識してもらえないのは、やはりまだまだ、わたしたちの聖公会が、教会の中のマイノリティに、思いを寄せる共同体になりきれていないからなのではないでしょうか。

「神は父にきまつてるだろう」とか「女だと思ってもらえないのは、努力が足りないからだ」という声が聞こえてきそうですが、そんなことを思う今日この頃です。なんとなくでも、一度考えていただけたら嬉しいです。



「アライ」とは、同盟や支援を意味する英語 ally が語源で、LGBT に代表される性的マイノリティを理解し支援するという考え方やその考えを持つ人のことです。

<http://www.city.iga.lg.jp/ctg/81171/81171.html> より

## ■ ■ ■ ■ ■ コラム わたしの瞳に映る景色 ⑩ ■ ■ ■ ■ ■

### ～ “もと男” で片付けないでください ～

『タリタ・クム』第 23 号より (2014 年 11 月 25 日発行)

10 月 20 日 (月) ～23 日 (木)、濟州島で行われた、日韓聖公会宣教協働 30 周年記念大会に参加をさせていただきました。この大会の宿泊に関して事前に問い合わせがあったのですが、相部屋の相手を男性の司祭と一緒に良いかというものでした。さすがに男性との相部屋は勘弁してくださいとお願いしたところ、誰か相部屋の相手を決めてくれとのこと。急遽、ある女性に、相部屋をお願いしました。

宿泊が伴う集まりでは、一般的に性別の問い合わせが申し込みのときになされます。女性と男性を分けて部屋割りをするためですね。女性と男性を分けて部屋割りをするのは、女性と男性が一緒の部屋で寝泊まりするのは、色々と不便だからでしょう。今回の

出来事は、やっぱりわたしは「女」だとは思われていないゆえに起こっています。“もと男”の後藤が女性と相部屋になるのは、好ましくなく、男性と相部屋なら問題がないという判断なのでしょう。

現在のわたしの身体の基本的な状態、機能は男性よりは女性に近い状態です。どう逆立ちをしても、男性のお風呂には入れませんし、男性の中で下着になって着替えをすることにはやはり抵抗があります。一方で、わたしが女性のお風呂に入ることや、一緒に着替えをすることに、抵抗をおぼえる女性がいるのも事実です。部屋割りの時に、わたしとの相部屋は嫌だという声があるのかもしれませんが。以前、ある女性から「後藤司祭と一緒にはお風呂に入れない」と他の人の前で言われたこともあります。別に、一緒にお風呂に入って欲しいなどとお願いをしてはいないのですが…。わたしとは一緒にお風呂には入れないこと、それはひとえに、お前が「男だ」だからという無言の圧力を発言から感じます。

そんな些細なことに、目くじらを立てるなんてと思われるかもしれませんが、しかし、つねに偏見を押しつけられるのは、やはり心地よいものではないのです。

日本聖公会の中のトランスジェンダーは、わたし後藤一人ではありませんので、宿泊を伴う様々な集まりに、わたしたちトランスジェンダーが参加する機会は増えることがあっても、減ることはありません。その度にわたしたちは、お前は“もと女”だ、“もと男”だという偏見に晒されなければならないのでしょうか。残念ながら、偏見をなくして行くことは、わたしたちだけの力では出来ないのです。偏見ではなく、事実でしょうという声が聞こえてきそうですが、どうして、わたしと「一緒にはお風呂に入れない」のか、考えてみていただけると幸いです。

考えてみても、やっぱり「無理」な場合もあるかもしれません。でも、その思いをみんなの前で口にされるのは、やっぱり悲しくなるものなのです。

※“もと女” “もと男”：皆さんが理解しやすいように、あえてこう表現しましたが、トランスジェンダーの性自認が変化するという意味ではありません。

## ■ ■ ■ ■ ■ コラム わたしの瞳に映る景色 ⑪ ■ ■ ■ ■ ■

### ～ どうして「同性愛」は罪なのでしょう？ ～

『タリタ・クム』第24号より（2015年5月25日発行）

最近、身近な人からの言葉で、あまり確りと「セクシュアル・マイノリティ」（\*1）を、理解してもらえていないなど感じるものが、何度かありました。悪気もないことは分かっていますが、同じような言葉を親しくない人に対して発すれば、トラブルになる可能性もあります。また、聞いている方は心地よくありません。

さて「セクシュアル・マイノリティ」を指し示す用語には、「同性愛」、「ゲイ」、「レズビアン」、「トランスジェンダー」、「インターセックス」等々、いろいろあります。なんとなくこんな意味ということは把握してくださっていることと思いますが、

人によって定義や使い方が違うことが間々あります。

この「同性愛」という言葉とその対義語「異性愛」や、「トランスジェンダー」とその対義語「シスジェンダー」等という分類は、本来価値中立なものです。良いとか悪いとかの価値判断はされていません。しかし、多くの方は「異性愛」「シスジェンダー」が正常で、「同性愛」「トランスジェンダー」は異常という価値観をこの分類に当てはめます。さらに教会の中では、「同性愛」「トランスジェンダー」は「罪」とまで言われることがあります。

「異性愛」に分類される人々は、もう一方の「同性愛」を、劣ったもの、異常なものとして、貶めることによって、自分たち「異性愛」者が相対的に優れたものであることを確認し、安心します。まさかあのフェアサイ派（ルカによる福音書 18 章 11 節参照）のように「この同性愛者のような者でもないことを感謝します」と祈ったりはしないでしょうが、自分たち「異性愛」者、「シスジェンダー」が正常で、「同性愛」者や「トランスジェンダー」が異常だという認識は、わりと多くの人の中にあります。

これがいわゆる「差別」の構造です。差別は「違い」を利用して行われますが、この「違い」自体は価値中立であって、差別の本質ではありません。この「違い」に対する価値判断が「差別」となって表れるのです。

キリスト教は、正典である聖書を自分たちの価値判断の基準として用います。熱心なキリスト教信者の皆さんは、聖書に「同性愛は罪」と記されていると何故か確信しています。それを根拠に、わたしたちセクシュアル・マイノリティの存在が罪で、存在を許しておくわけにはならないと考え、行動に移すことが自らの使命だと信じるのです。「お前はいらない」。このような他人の存在を全否定し、命の輝きを奪い取る言葉は、神さまの権威を無理やり後ろ盾にした、暴力であることをまず頭に入れてもらいたいと思います。

キリスト教のように、自分の差別感を肯定出来る根拠があれば、それを利用し自分の誤った思いを正当化し主張したくなる気持ちは、決して同意は出来ませんが理解は出来ます。しかし、キリスト教信者だけではなく、一般的にも人々の思いの中に横たわる「同性愛は認めない」や「気持ち悪い」といった、同性愛者やトランスジェンダーに対する悪いイメージは、いったいどこから来るのでしょうか。今更ですが、「セクシュアル・マイノリティ」に関する基礎知識を、次号から何回かにわたって再確認してみたいと思います。

#### 【（\*1）セクシュアル・マイノリティ

性的な事柄を理由に、差別を受け、少数者の立場に置かれている人たちのこと。同性愛者、両性愛者、トランスセクシュアルなど様々な存在を包括して表す。性的少数者と表現することもある。「同性愛」という言葉に対する嫌悪感を避けるために用いられることもあり、問題をぼやかす危険性がある反面、名称を持っていない性的少数者を含んだ用語として積極的に用いられる側面もある。英語では LGBT を使う。】

～ セクシュアル・マイノリティとは？ ～

『タリタ・クム』第25号より（2015年10月25日発行）

今回から、しばらく「セクシュアル・マイノリティ」に関する基礎知識を、再確認しますが、まずセクシュアル・マイノリティとは何かを大まかに押さえておきたいと思います。その前に、セクシュアリティとは何でしょう。性のあり方を示すセクシュアリティは、性行為や生殖、性別という限定された意味だけで把握されることが多いのですが、もっと広く、心や生命を含んだ人間全体を包み込む広範な概念です。ですから、ここではセクシュアリティを、生殖や性行為という行為よりも、性的指向、性的自認等を含めた、人間全体、生活や人生の問題として考えていきます。

さて、人間の性別、セクシュアリティは、生物学的な性（sex）、性的自認（gender identity）、性的指向（sexual orientation）、性別役割（gender role）の4つの要素によって、大まかに分類することが出来ます。以下、生物学的な性（sex）、性的自認（gender identity）、性的指向（sexual orientation）の3つの要素を、セクシュアル・マイノリティとは何かという視点から見てゆきたいと思います。

**I. 生物学的な性（sex）**：生物学的な性は、受精のときに性染色体がXXであれば女性になり、XYであれば男性になります。しかし稀に、性染色体の通りに、女性もしくは男性に性分化しない場合等もあります。また、XX、XY以外にも様々な性染色体の組み合わせを持つ人が知られています。

ですので、基本的には、女性か男性のいずれかに区別できますが、染色体の性別、ホルモンなどの内分泌の性別、卵巣や精巣等の内性器の性別、ペニス（陰茎）等の外性器の性別で、女性と男性の違いが大まかに認められながらも、それぞれに中間的な状態がスペクトラム状にあり得るのです。しかし、日本では社会生活を営む上で、（性別の登録を保留することは出来ますが）法律上女性か男性のどちらかに振り分けられてしまいます。

この身体の性別が、典型的でない状態は、「性分化疾患」と呼ばれます。当事者の多くは、自らをセクシュアル・マイノリティであると認識することは少なく、医療的なサポート体制の充実を求めています。

**II. 性的自認（gender identity）**：性的自認とは、自分が女性であるか、男性であるかの認識です。一般的に体が女性であれば、自分自身を女だと認識し、反対に体が男性であれば、自分を男性であると認識します。性同一性障碍やトランスジェンダー（FtM, MtF）等の場合は、この性的自認が体の性別とは違う認識を示します。また、性的自認が女性でも男性でもない、Xジェンダー（FtX, MtX）と呼ばれる人々もいます。生物学的な体の性別同様、性的自認にも中間的な状態があり、女性の自認、男性の自認とはっきりと二分することは出来ませんし、それは境目のないスペクトラムなのです。

**III. 性的指向（sexual orientation）**：性的指向は、異性に魅かれるか、同性に魅かれるかという意識です。「女性」だったら「男性」を、「男性」だったら「女性」を好きになるのが典型的で、異性愛と呼ばれます。一方で自分を「女性」と自認する人が「女

性」に魅かれる場合や自分を「男性」と自認する人が「男性」に魅かれる場合は、同性指向、同性愛であると言えます。そして、やはりこの性的指向もスペクトラムであり、女性にも男性にも魅かれる人をバイセクシュアル (bisexual)、性別に関係なく人に魅力を感じる人をパンセクシュアル (pansexual) やポリセクシュアル (polysexual)、性的な魅力を感じない人をアセクシュアル/エイセクシュアル (asexual/A-sexual) と呼び、女性か男性かの二分法では括ることは出来ません。





よくセクシュアル・マイノリティは「不自然」だと言われることがありますが、自然（神さま）は多様性を好まれるのに、社会（人間）が多様性を容認出来ないということが、以上の例を見て言えるのではないのでしょうか。

以上3つの要素は、それぞれ独立したものであり、基本的には相互に影響し合わないと考えられます。例えば、わたし、後藤香織は自分を「女性」だと思っているので、「男性」が好きなのではないかと、言われることがあります。また「男性同性愛者は、男性が好きなのだから、女性になりたいと思っている」という様に思われることも多いようですが、性的指向と性自認の間に、男女二分法の異性愛になぞらえる関連性はありません。

最初にセクシュアリティの1要素として挙げた性別役割 (gender role) は、上記の3つの要素とは違い、社会環境・生育環境に左右されるものと考えられます。性別役割 (gender role) は、性的自認 (gender identity) と混同されがちですが、別の要素であることに注意してください。ですから、体の性別が「女性」であり、性自認も「女性」、性的指向が「男性」に向く、典型的な女性が、男性の性別役割 (gender role) を担って社会生活を送るということもあり得ます。典型的な女性と男性の中にも、社会が求める「女らしさ」「男らしさ」という性別役割にとらわれたくないという人は沢山いますので理解していただけたらと思いますが、わたしのようなトランスジェンダーが、この性別役割の非典型ではないことに注意してください。

以上見てきましたように、人間の性は典型的な女性と男性の間に、どちらにも明確には分けられない状態をはさんで、様々な要素のスペクトラムで示されるものです。セクシュアル・マイノリティと一口に言っても、一人ずつ違う多様なセクシュアリティがあると考えていただくのが良いのでしょうか。そうは言っても、一人ずつ違う多様なセクシュアリティでは、捉えどころがなくなってしまいます。あくまでも参考であることを踏まえていただき、今回は代表的なセクシュアル・マイノリティを紹介します。

## 「性」を考える切り口

- 身体的な性 (Sex)  

- 性自認 (Gender Identity)  

- 性的指向 (Sexual Orientation)  

- 社会的な性 (Gender Role)  


※同性が好きの人が、性別を変えたいと思っているとは限らない。  
性自認と性的指向は別の概念。

※性のあり方の全体を「セクシュアリティ」と呼びます。

(c) 2013 Nijiir Diversity All rights reserved.

2

チャートをもとに今いちど自分の”性”を考えてみましょう  
©2013 Nijiir Diversity All rights reserved.  
<http://greenz.jp/2013/04/09/nijiir-diversity/>より

～ 代表的なセクシュアル・マイノリティ ～

『タリタ・クム』第26号より（2016年3月25日発行）

以下に、前回見たセクシュアリティ3要素別に、代表的なセクシュアル・マイノリティを見てみましょう。

■ 身体的性別の非典型・性分化疾患

まず、医療分野や医師によって見解相違があり、決定的な定義はありませんが、生物学的に典型的な男女と異なる身体的な特徴を持つ人たちが存在しています。最近までインターセクシュアルとも呼ばれていた、性分化疾患（disorders of sex differentiation）の人たちです。しかし、「性分化疾患」という単一の疾患があるわけではなく、アンドロゲン不応症や先天性副腎皮質過形成、卵精巢性性分化疾患、クラインフェルター症候群、ターナー症候群など、身体的性別に関する様々なレベルでの、約60種類以上の症候群・疾患群を包括する用語です。身体的性別といっても、性染色体の構成、性腺、内性器、外性器、二次性徴の性、など様々な場合があり、これらの身体的性別にかかわる非典型的な特徴に関するものです。すでに見たように、厳密には、生物学的性の実態は、女性と男性を両極としたスペクトラムで、その両極に多数の人が集中しています。ここでは、代表的なセクシュアル・マイノリティとして紹介していますが、既出のように当事者の中では、自分たちの状況をセクシュアリティの問題ではなく、「障害」として捉えて医療の高度化を望む声が多いそうです。

ですので、身体的性別に関する非典型的な特徴を持つ人々については、セクシュアル・マイノリティとは、別に考えていただく方が良いでしょう。

オランダ社会文化計画局報告書

「インターセックスの状態／性分化疾患と共に生きる」

人権先進国であるオランダの文部科学省に当たる教育文化科学省の解放政策局の要請により、政策研究機関である社会文化計画局が作成した、世界ではじめての国家機関による、DSDs（体の性の様々な発達：性分化疾患）を持つ人々の実態調査書を日本語に翻訳しました！

探索的調査としながらも、DSDsを持つ人々への綿密なインタビューや、世界中の患者団体、多くの調査研究からの情報などを総合し、誤解や偏見・無理解の多いDSDsについて、極めて客観的で当事者中心となった報告書になっています。

近年日本でも、教育現場や地方・国レベルで、性的マイノリティの人々の一つとしてDSDsが取り上げられるようになっていますが、DSDについての知識が不十分なまま進められている現状があります。

性教育などでDSDsについて触れたり、地方・国レベルでDSDを持つ人々と家族についての政策を進言したいとお考えの皆様には、とても参考になる資料です。是非ご参照下さい。

<http://www.nexdsd.com/#!dsd/c1jgj> より

## ■性的自認の非典型・トランスジェンダー

つぎに挙げるのは、性的自認の非典型的のケースです。

性自認も生物学的性と同様に、女性の自認と男性の自認を両極としたスペクトラムです。身体的性別が、女性の場合、性自認も女性、身体的性別が、男性の場合、性自認も男性というのが典型的ですが、身体が女性であるが、性自認男は性、反対に身体が男性であるが、性自認は女性である状態を、トランスジェンダーと呼びます。広義にはトランスセクシュアル (TS)、トランスジェンダー (狭義)、トランスヴェスタイト (TV) の総称で、自分の生物学的性別に違和感を持ち、何らかの形で社会的性別 (ジェンダー) の越境を試みる人のことです。狭義ではトランスヴェスタイトやトランスセクシュアルと区別して、体のつくりにはこだわらないが、生物学的性とは異なる性自認に即したライフスタイルで生きることを重視する人をトランスジェンダーと呼びます。最近では、女性・男性にこだわらず、多様なジェンダーを自分の主体的な選択で、自由に生きていこうというあり方を示す言葉としても用いられることがあります。また、トランスジェンダーが、性別二元論を前提に、その越境を意味するニュアンスを持っているため、既存の性別観に捕らわれない生き方をする者の総称として、ジェンダーキア / Genderqueer という用語も提唱されています。

日本でよく用いられる「性同一性障害 / Gender Identity Disorder」は、病名であるためこの言葉を嫌う当事者も多く、海外では 医療の現場以外で一般的に使われることはありません。

また、「ニューハーフ」という和製英語が、1980 年頃から使われ始めています。元々の使われ方とは、異なりますが、現在では、女装した男性あるいは性別適合手術をした元男性等、生物学的男性が女性化して、特に接客業 (ホステス)、ショービジネス等に従事する場合に、この呼称が用いられています。「ニューハーフ」を自称する当事者以外の MtF トランスジェンダーには、使わないで欲しい言葉です。

## ■性的指向の非典型・同性愛者

3 番目に、性的指向の非典型では同性愛者を取り上げます。同性愛者とは、性的指向が同性に向かう人です。繰り返しになりますが、趣味として選択する嗜好や自分で決定する志向ではありません。(ただし、同性愛の運動の中では、あえて嗜好や志向を使う人もいますので注意が必要です。) 性的指向もやはりスペクトラムです。同性愛が「病気」と規定されたのは、1869 年にハンガリーの医学者ベンケルト / Benkert が提唱したのが始まりです。このときに同性愛 (Homosexuality) と異性愛 (Heterosexuality) という言葉も作られました。ベンケルトは宗教的に「罪人」とされていた同性愛者の地位確立のために「病気」と規定したのですが、その後「病気」とされたために「異常」「倒錯」「変態」というレッテル貼りが行われ、研究の対象になってしまいます。最近までキリスト教界では、同性愛者を矯正し、異性愛者に治そうとする団体が多くありましたが、アメリカ精神医学会は、1973 年に同性愛を精神疾患のリストから外し治療の対象外としてい



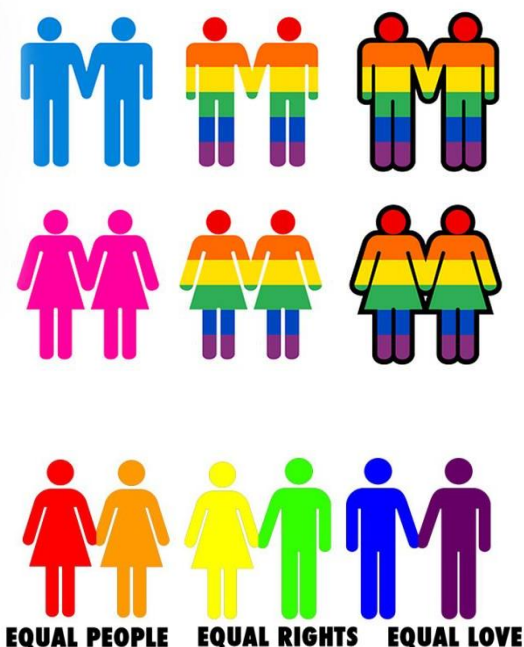
ます。また、WHO も、1990 年に「同性愛は精神疾患ではない」とし、1992 年の「国際疾病分類(ICD: International Classification of Diseases)」の第 10 版で、「同性愛はいかなる意味でも治療の対象とはならない」と宣言しています。

日本では 1995 年 1 月になってやっと、日本精神神経医学会が、上記の国際疾病分類 ICD を尊重するという見解を発表して、同性愛を治療の対象から外しています。

厳密な調査は人権侵害になるため行われませんが、同性愛の人の割合は、少なく見積もっても、民族や国、地域に関係なく人口の 3~5%といわれています。これだけ高い割合で、同性愛の人がいるにも拘わらず、目に見えない存在とされているのは、社会的な偏見がそれだけ大きいことを表しているといえるでしょう。「世界がもしも 100 人の村だったら」(マガジンハウス)では、「90 人が異性愛者で、10 人が同性愛者です」と記されています。

以上、代表的なセクシュアル・マイノリティを概観しましたが、わたしたちの社会は女と男のいずれかに分けられる男女二分法の社会です。しかし、それは社会が制度として作り出している枠組みであることを、まず認識していただきたいと思います。そして「異性愛が当たり前で同性愛は『異常』」「人間は男か女のどちらかしかない」という思い込みや偏見が、典型的な性別の枠組みに入らない人々にとって、どれほど無神経な対応を生み出しているのかを考えてみていただきたいと思います。

折角、神さまは多様で豊かな人間の“性”を、わたしたちに与えてくださっているのに、わたしたちの乏しさが、豊かな人間の“性”を乏しいものにしてしまっているのではないか、そんな気がしてなりません。



<http://jflag.org/>より



2002年、日本聖公会正義と平和委員会の中にジェンダーについてとりくむサブコミッティが設置され、2004年以降「正義と平和委員会・ジェンダープロジェクト」として活動してきました。当初から性の多様性についての取り組みが必要と考えつつもなかなか取り組めないでいましたが、2008年、ニューズレター『タリタ・クム』第10号に掲載した記事をきっかけに、わたしたち自身が当事者と出会えていないことに気づかされ(参照:『タリタ・クム』第11号)、2009年8月に初めて性的少数者の声を聴くための学習会を開催しました。そして、実際に当事者に出会って声を聴き、知ることがいかに大切かを体感したのです。

以来、後藤香織司祭には多忙な中『タリタ・クム』にコラムを連載いただき2016年3月25日発行分をもって13回を数えるに至りました。

世界の聖公会では性の多様性、ことに同性愛をめぐる分裂の危機がさげられるほどの問題になっているにもかかわらず、日本聖公会ではそれほどの危機感もなく議論にもなっていないのが現状です。それは、わたしたちの教会に当事者がいないからではなく、まだまだ「声を挙げられない」状況だからだと思います。今回、「わたしの瞳に映る景色」を小冊子にまとめようと企画したのは、当事者の思いを少しでも多くの人に知ってほしい、日本聖公会が性的少数者に対して決して無関心ではないことを知ってほしい、そのような思いからです。そして、声を挙げてみよう、と思われるような土壌を作り出すための一助になればと心から願います。

神様に造られたわたしたち一人ひとりの存在は、無条件に存在そのものが祝福されるはずで、すべての人が尊重され生かされる教会となることを願ってやみません。

2016年4月

日本聖公会正義と平和委員会ジェンダープロジェクトメンバー一同

\*本冊子は、2016年4月に発行されたものに、最小限の訂正を加えて2016年11月に再発行されたものです。

\*本文中の Gender Identity Disorder の訳語「性同一性障がい」「性同一性障害」「性同一性障碍」はそれぞれの原文のままとしました。

(参考) 講演会ちらし(2016年4月23日実施)



## 「レズビアン」という生き方

～ 多様な性・多様な愛 ～



2009年8月に、大阪聖パウロ教会にて公開学習会「わたしの瞳にうつる風景 ～性同一性障がい者の声～」を行って以来7年振りのセクシュアル・マイノリティ（LGBTI）について学ぶ学習会となります。この出会いを通して、少しでも多くの人とともに多様な性や愛の在り方を考える機会となることを願っています。多くの方の参加をお待ちしています。

**日時 2016年4月23日(土)**

**13:30～15:30 参加費無料**

※ 講演終了後お茶の用意があります。(終了 16:00)

### 場所

日本聖公会大阪教区

**大阪聖パウロ教会**

〒530-0013 大阪府大阪市北区茶屋町2-30

問い合わせ先：大岡左代子（京都教区執事）



最寄駅：阪急梅田（徒歩5分）

**講師 堀江有里さん**

信仰とセクシュアリティを考えるキリスト者の会（ECQA）代表、  
日本基督教団・牧師（無任所教師）、関西学院大学神学部ほか非常勤講師。  
専門分野は、社会学、レズビアン・スタディーズ、クィア神学。1994年より性的少数者の相談業務に従事。主著は『「レズビアン」という生き方——キリスト教の異性愛主義を問う』（新教出版社、2006年）、『レズビアン・アイデンティティーズ』（洛北出版、2015年）など。

- 主催** 日本聖公会正義と平和委員会  
ジェンダープロジェクト  
日本聖公会女性に関する課題の担当者
- 共催** 日本聖公会 人権問題担当者  
大阪教区宣教師 社会宣教委員会  
中部教区宣教師 社会宣教部  
京都教区宣教師 社会部

セクシュアル・マイノリティ/LGBTI とは、  
L(レズビアン)、G(ゲイ)、B(バイセクシュアル)、  
T(トランスジェンダー)、I(インターセックス)

\*性的指向や性自認に関して自らを表現するために人びとが使う言葉はさまざまです。人びとを一つのアイデンティティにまとめたり、固定したり差別したり、また多様性を無視しようという意図はありません。